



父の「遺志」を受けて
成蹊大学への進学を決意

— 成蹊大学工学部機械工学科に入学されたきっかけは何だったのでしょうか。

三田 子どもの頃から、機械工学科に進もうと決めていました。父が電気系のエンジニアで、科学技術に関する話を聞きながら育ったためかもしれません。当時は、電気工学よりも、機械工学の方が応用範囲が広いと言われていましたので、自分は機械系のエンジニアを目指そうという意識を、かなり早くから持っていました。

— モノづくりに興味があったのですか。

三田 モノづくりに関心がありました。それが、それ以上に得意だったのが数学で、

— 戦績はどうだったのですか。

三田 アメフトは、強豪校の場合、攻守で選手が入れ替わるのが一般的ですが、部員が十四名しかいなかったため、その余裕がありません。私はオフフェンスではセンター、ディフェンスの時はラインバックを務め、ずっと出ずっぱりでした。

それでも、オールジャパンの選手にも選ばれた細谷英樹監督のもと、ハードな練習を積んでいましたから、めきめき実力をつけていきました。リーグ戦の三部、二部を無敗で勝ち上がり、三年生の時には、一部への昇格をかけて、東大との入れ替え戦に臨みました。この試合のことは、今でも忘れることができません。というのも、前半に大量リードをしていたにもかかわらず、後半に大逆転負けを喫したからです。しかも、終了直前のラストワンプレイで試合を引っぱり返されてしまいました。号泣する私たちに、細谷監督は「君たちは相手をなめてかかっていた。その奢りが敗戦の原因だ」と叱咤されました。その言葉に私ははっとしました。確かに自分たちは自惚れていた。春のオープン戦で一部のチームと対等に戦っていましたし、二部では無敗。昇格するのは当たり前、負けるはずがないという奢りがあったことに気づいたのです。いい経験をしたと思います。

卒業研究の雪上車の制作で
キャタピラの設計を担当

— 印象に残っている先生はいらっしゃいますか。

中部電力株式会社 代表取締役社長

三田 敏雄

Toshio Mita

社会基盤を担う電力業界のトップとして活躍されているのが、中部電力社長の三田敏雄さん。ベストよりさらに上を目指す「ベター・ザン・ベスト」の信念を持って、日々の業務に携わっていらっしゃいます。成蹊大学時代の思い出と、後輩たちに向けての熱いメッセージを語っていただきました。

現状に満足してしまうと

組織も技術も停滞する

「ベター・ザン・ベスト」の精神で

常に改善を目指す熱い心を持ち続けたい

とくに幾何学が大好きでした。幾何学は理屈で解くものでなく、ひらめきが重要です。問題に集中して考えていくと、ふっと発想が浮かぶ。その瞬間がとても楽しかったのです。一方で、国語、英語は記憶の学問であり、努力を継続しないと身につけませんから、苦手でした。今でもあまり好きではありません(笑)。完全な理系人間だったわけで、必然的に理系学部に進むことになりました。

成蹊大学を選んだのは、父の強い勧めがあったためです。当時の工学部長は福田節雄先生で、父から「福田先生のような優秀な研究者が教える大学なら、絶対間違いない」と推奨されました。少人数の教育体制も気に入ったようで「技術者はモノに触りながら学ばなければ、本物の実力は修得できない。マスプロ型の大学に進むよりも、実験装置が必ず一人ひとりの手に行き届く大学の方がいい」と言われました。

実は、父は受験の一月ほど前に亡くなりました。ですから、どの大学を受験するかといった相談は病床で行われたのも研究に参加しました。

私たちのグループが担当したのは、キャタピラの設計です。雪道でスピードを出しても滑りにくくするためには、剪断面積を大きくすることが重要になります。当時は、安価で簡単に作れるため、四角形のキャタピラが主流でしたが、雪上車には適しません。そこで、さまざまな検討を重ねた結果、私たちは、正三角形のキャタピラを開発することにしました。これは画期的なことだったと自負しています。

この研究の過程で、三菱自動車と交渉してエンジンを譲り受けたり、錦糸町の

のです。その意味では、私が成蹊大学に入学したことは、父の遺志だったと言ってもいいでしょう。

アメフト部に所属

入れ替え戦の敗戦が忘れられない

— 大学時代の思い出をお聞かせください。

三田 高校の時はラグビー部だったので、成蹊のラグビー部は強豪なので、とてもついていけないと断念し、最初は工学部のサッカー部に入学しました。けれども、一年生の六月頃、新たにアメリカンフットボール部を発足させようという話を持ち上がりました。「体育会ではなく、同好会レベルだから、楽しみながらプレーできるよ」という友人の誘い文句に乗って、入部することになりました。ところが、いざ入ってみると、まったく話が違い、練習は体育会並みのハードさでした。夏の終わり頃から練習がスタートしたのですが、月曜日以外は毎日練習で、土日も休まずグラウンドで汗を流していました。

部品店でギアボックスなどを購入したり、設計したキャタピラの製作を日立市にある製作所に発注したり、貴重な体験を得ることができました。その甲斐あって、完成した雪上車は、志賀高原で行われた試走で抜群の機能を発揮しました。スノーモービルが発売された頃だったので、新雪が七センチほど積もると、もうスノーモービルは走行不可能です。それに対して、私たちの雪上車は、そんな雪の上でもスムーズに走ることができました。もっとも、構造研究のための実験車両ですから、デザイン性は無視であり、見た目は不格好なものでしたが(笑)。

技術者は自然に対する

畏敬の念を持つことが重要

— 電力会社を選ばれたのは、どのような考えからですか。

三田 最大の理由は、地元に戻って就職したいという思いがあったからです。また、電力事業は生活や産業、もつといえは国家の基盤になるものです。そんな公益的な事業に携わること、技術者として社会に貢献できる場所にも魅力を感じました。

— 成蹊大学での学びが、現在の仕事に生かされていると感じられることはありますか。

三田 大学で熱力学、流体力学など、多様な学問を学ぶ中で痛感したのは、自然





三田 敏雄（みた・としお）

1946年、愛知県生まれ。1969年、成蹊大学工学部機械工学科を卒業し、中部電力株式会社に入社。以来、一貫して火力畑を歩む。1999年、支配人火力センター川越火力発電所所長、2001年、同火力センター所長、2003年、取締役東京支社長、2005年、常務取締役販売本部長などを経て、2006年、代表取締役社長に就任。

の大きさです。今でも社員たちによく語るのには「コンピュータが発達したからといって、それに慢心してはいけません。自然はもっと大きなものであり、我々はそのごく一部しか知り得ていない。たとえば、川に石を投げ入れた時、どんなに解析技術が進歩しても、そこにどんなな波紋が広がるかを完璧に解析することはできない。川底の状態、上流からの流れなど、さまざまな要因が影響しているからだ。自然には、人間の頭では計り知れないものが満ちあふれている。技術者は、そういう自然に対する畏敬の念、真摯な気持ちが必要にならない。それが欠如すると、自然、社会の調和を乱すものを設計することにもつながりかねない」ということです。つまり、技術者には自然への謙虚さが大切であり、それが安全を遵守する基盤になる。とくに原子力などを扱う当社の社員は肝に銘じておかなければならないと考えています。こうした感覚、信念は、大学での研究を通して感得したものです。

また、アメフト部の活動も貴重な財産になっています。合宿の練習はとてハードで、苦しい思いもしましたが、スケジュールをこなしていけば、必ず終わりがきます。その経験を通して、どんなに辛くても、それが一生続くわけではない。ならば、その終わりの時期がくるまでは精いっぱい努力しよう。苦しい時ほど、逃げないで、むしろ積極的に立ち向かおう。そんな姿勢が身についたように思います。

ベストよりも上を目指す気持ちも大切に

— 仕事の上でポリシーにされていることはありますか。

三田 「おかげさま」という感謝の気持ちを大切にしています。人生は何事も一人でできるわけではなく、あらゆるもの影響、おかげで成り立っています。会社が今あるのも、お客さま、地域社会、ステークホルダー、そして社員のおかげです。そんな気持ちを大切にしながら、仕事をしていきたいですね。

もう一つ、座右の銘にしているのが「ベター・ザン・ベスト（超最良）」という言葉です。技術も組織も、現状を最善と捉えて、満足した瞬間に停滞します。もっといいものがあるはずだと、より上を目指す熱い心がなければ、進歩は生まれません。自分や組織に悪いところはないか、常に省みて、改革意識を持ち続けることが重要です。そして、私はベストよりも上の状態は無限にあるという世界観も抱えています。というより、あらゆるものが無限と言ってもいいかもしれません。宇宙には果てがないし、逆に極小の世界も、物質の最小単位はクォークとされていますが、それは単に人間が認識できるのがそこまでだということにすぎない。おそらくクォークを構成するものがあるはずだという意識を持っています。同様に、仕事においても、現状がベスト、限界だと思えるのは、自分が認識できる範囲

での話です。必ずしも先があり、それに向けて前進する心を持つことが大切だと考えています。

— 今後の成蹊大学に期待されることをお聞かせください。

三田 成蹊大学の魅力は、自然に恵まれたキャンパスと、アットホームな雰囲気にあると思います。ある統計によると、ノーベル賞学者のような天才が育つのは、都市の中心部のビル群ではなく、自然にあふれた豊かなのんびりとした環境なのだそうです。成蹊大学にはそんな環境がありますから、それを堅持してほしいですね。

— 最後に、成蹊学園の後輩たちに向けて、メッセージをお願いします。

三田 大学時代は、人生を築くために最も重要な時期ですから、自分の人生を真剣に考える機会を持つてほしいと思います。自分はどう生きたいのか。学問研究を通して、あるいはクラブ活動、恩師や友人との交流などを通して、見つめることが肝心です。私も、父が亡くなったことを契機に、大学に進学するかどうかも含めて、深く悩みました。その時に、明確な解答が得られたわけではありませんが、考えたという行為自体が、振り返ってみると、大きな転換期になったように思います。そんな貴重な学生時代を大切にしてほしいと願っています。